

呼びかけと呼びかけの間

有安和人

一 呼びかけ

私は、私の顔を見ることができない。もちろん、鏡といった道具を用いれば見ることはできる。しかし、鏡に映った顔には、顔本来の表情が消失している。それは鏡に対する顔であり、鏡に対する表情でしかない。つまり、今まさに現前している私の顔を、私は見ることができない。

顔は表情を持つ。表情がもつとも豊かに表れるのは顔であるが、表情は顔だけでなく、全身に表れる。表情は絶え間なく表出される。眠っている間でさえ、身体は表情を表出する。つまり、私から表情が消えるとき、それは私が死ぬときである。私が生きている限り、表情は常に表出される。

私は、自分の表情を見ることがないし、見ることもできない。私は、自分が表情を表出していることに気づくこともない。したがって、表情は私に属さない。私のためにあるのではない。表情は他者に向けられているのである。つまり、表情は他者に呼びかけているのである。私の身体は、他者に呼びかけているのである。

私の身体全体が表情を表出し、私の身体が他者に呼びかけているということは、逆から見れば、私は他者の身体によつて呼びかけられていることを意味する。他者の身体は常に表情を表出している。私が他者を感じるということ、私は、私の身体が他者の身体によつて呼びかけられたということである。つまり、身体は「呼びかけ、呼びかけられる」のである。

「呼びかけ、呼びかけられる」という身体の本性を根拠づける事実はいくつか挙げられる。第一に、身体の「同調性」である⁽¹⁾。例えば、他者が私に向かつて微笑みかけると、私はつられて微笑む。このとき、もし怒りや悲しみで応えようとすると、苦痛とはいわないまでも、違和感を覚える。このことは実験によつても確かめられている。例えば、見知らぬ人の顔写真を用意し、それを私が見るとする。その写真が笑顔だと、私の頬骨筋が活動する。怒り顔だと、私の皺眉筋が活動する (Dimberg)。つまり、他者の表情に私の身体が同調し、同じ表情が誘発されるのである。

第二に、他者の動作を見ると、自分の頭の中で同じ動作をしているかのように活動をする。「ミラー・ニューロン (mirror neuron)」の存在である。例えば他者が、目の前にあるボールを取ろうとして腕を伸ばし、その様子を私が見ているとすると、そのとき、私の前頭葉と頭頂葉のニューロン (神経細胞) が活動する。これらのニューロンは、私と同じ運動を実行するときも活動する。このようなニューロンは、他者の動作を脳に映したかのように活動することから、ミラー・ニューロンと呼ばれている⁽²⁾。つまり、他者の動作を見るとき、私の脳内で私が同じ動作をしているかのようなニューロン活動が生じ、他者を内的に模倣しているのである。また、脳内だけではなく、呼吸も変化し、対応する筋肉に電気的活動が生じることともわかっている (Fadiga et al, 1995)。つまり、他者の身体に私の身体は同調し、他者の動作を潜在的に模倣するのである。

第三に、人と物体とを我々が区別している事実である。しかも、幼時の段階から区別しているのである。例えば誰

かに、主な関節に電球をつけてもらい、真つ暗な部屋で動いてもらうとする。すると成人は、その光のパターンに人を感じるし、感情状態までも感じる。幼児では遅くとも生後六ヶ月までに、物体につけられた光の抽象的な運動と人につけられた光の運動とを区別するようになる (Moore et al.)。

第四に、新生児が物体よりも人の顔を好むという事実である。生後五日以内の新生児に、「人の顔」「弓の標的」「新聞紙面」「白色」「黄色」「赤色」の六種類の円盤状の図を見せると、「人の顔」をもっとも長く注視する (大坪、八三・八四頁)。つまり、人の顔に選択的に反応するのである。このことは、人が生得的に他者に反応すること、即ち他者に呼びかけられるということを示唆している。

第五に、人は孤独を感じるという事実である。孤独を感じるということは、他者が私を呼びかけていることと、私が他者を呼びかけていることを同時に根拠づける。なぜなら、他者の呼びかけがなければ、他者を「他者」として私が認識することはないし、私が他者を呼びかけていなければ、私が孤独を感じることもないからである。

以上は、他者によって呼びかけられるということであった。しかし、呼びかけるものは人だけではない。人は自然に対して表情を感じる。例えば、山や海に対して、悲しみや優しさを感じる。それは、人が山や海によって呼びかけられるからである。また、呼びかけられるからこそ、芸術や信仰が生れてきたのである。即ち、山川草木に呼びかけられるからこそ、歌や絵といった表現へと動機づけられるのである。池や滝や山に呼びかけられるからこそ、そこに神を感じてきたのである。呼びかけられることは、「雰囲気」という言葉によっても裏付けられる。人は、「場」に何かしら感じるのである。それは、場から呼びかけられるのであり、その呼びかけから生じる感情が気分である。

はじめに呼びかけありき。呼びかけは、人が生まれる前からあった。そして、呼びかけと呼びかけの「間」に、言葉が生まれ、人間が生まれ、「まこと」と「いつわり」、そして道徳や殺し合い等々が生まれる。

二「対」

他者と向き合うとき、私の身体は他者によって呼びかけられ、他者の身体は私によって呼びかけられる。そして、お互いに相手の動作や表情を潜在的に模倣する。即ち、私の身体は他者の身体と同調する。つまり、他者と向き合うときは、他者と「対」になる¹⁾。そして、私と他者の間に共感が生まれる²⁾。身体の同調性もしくは模倣が共感と関係していることは、「身になる」「身を置く」という表現によって裏付けられる。我々は、他者の心的状態を推し量ろうとするとき、他者の「身になる」、他者の立場に「身を置く」と表現する。つまり、想像によって他者を模倣し、他者を演じることによつて、共感しようとするわけである³⁾。

人は「対」になることによつて、自己となり他者となる。即ち、自己の概念は、「対」になることによつてのみ生まれる。概念を持つとは、対象を区別し、同一であると認識できることである（真理条件もその手段の一つである）⁴⁾。自己の概念を持つとは自己を他者から区別することであり、他者の概念を持つとは他者を自己から区別することであるから、自己と他者の概念は同時に生じなければならない。それは、他者と「対」になることによつてはじめて可能となる。「対」になる体験によつてはじめて可能となる。

例えば、「対」になつているとき、突然相手が体を閉じるとする。同調が変調し、「違和感」を覚える。この違和感が自己を分かつのである。違和感が境界となつて、自己と他者に「分け合う」のである。つまり、違和感が契機（境界）となり、「対」の「分かち合い」が生じ、この「分かち合い」が自己という概念の誕生である。乳児の生活は「対」になることから始まる。最初に「対」になるのは母親である。母親が最初に体を閉じるのは、離乳のときである。おそらく、離乳期に自他の区別が生じ始めるのではないだろうか。実際幼児が、鏡に映つた自己を自己として認

識するのは生後一五から一八ヶ月であり、「自己」に関する代名詞を使い始めるのは生後一八から二四ヶ月である（キーン、一〇一、一〇八頁）。

「分かち合い」から自他が生まれることによつて、「分別（ぶんべつ）」の対象として、即ち思ひはかる対象として環境が現出する。例えばリンゴを見ても、すぐにとつて食へることはできなくなる。他者もそのリンゴを見ているからである。人は、他者の身体に同調することによつて、他者の視線をたどり、他者の欲求を直感する⁽²⁾。他者を出し抜いて「分捕る」か、他者と「分け合う」のか、「分別（ぶんべつ）」せねばならない。

ここに「行為」というものが誕生する。「分別（ぶんべつ）」することは消費の「遅延」である。つまり、欲求行動の「抑制」である。消費が「遅延」されることによつて、リンゴは真の意味での「対象」、即ち前に投げられてあるもの（object）、もしくは目的となる⁽³⁾。そして、リンゴに向かつて、他者の視点から自分の行動をはかるようになる。他者から見ると自分の行動がどう見えるのか、あらかじめはかり、行動中もはかつている。このことが即ち、自分の行動を意識していることに他ならない。そもそも他者が存在しなければ、自分の行動を意識する必要はない。他者と「取り合う」から、他者の行動をはかり、かつ他者の視点から自分の行動をはかるのである。こうして、他者・自己という関係性が生まれる。

他者の行動を見ると、他者の「はかり事」、即ち目標や目的が自己にとつての最大の関心事となる。だから動作が指示する目的が把握されなければ、その動作は行為として把握されないのである⁽⁴⁾。例えば、他者の動作を見て、その目的が把握されなければ、その動作は私にとつて不可解なものとなる。つまり人は、他者の動作が指示する目的を把握したときのみ、他者の動作を行為として把握するのである。

他者の行為の結果は、自己が予測していた「はかり事」と重なる（合致する）ときもあるし、重ならないときもあ

る。重なるときは、行為は「まこと(真の事)」になり、重ならないときは「作り事」になる¹⁰⁾。そして、結果として「分捕る」と、「作り事」は「欺き」となる。結果として「分け合う」と、「まこと」は「正義」となる。つまり、「取り合い」から行為が生まれ、行為から真偽や善悪が生まれるのである。

三「証し」

「企てる」の類義語としての「はかる」や「たくらむ」は、「欺き」という含意を持っている。このことは、人の心が「欺き」にあること、「欺き」が頻繁に起こることを示唆している。おそらく、人類誕生時から欺きはあったであらう¹¹⁾。

欺きの誕生は、「語り」が生れる動機となる。身振りをすることや、語ることを動機づけるもの、それは「証し」である。「私はあなたを欺かない」ということを証すのである。「明かし(偽りが無いこと)」を「証し」するのである。「身の証し」が最古の身振り、もしくは最古の語りであらう。身体の同調性は、共同行動を可能にする。単純な行動ならば、同調することによって共同行動は可能であり、そこに語りは必要ない。しかし、「欺き」が生れると、「私は欺かない」ということを証さねば、共同行動や共同生活ができなくなる。このことは、チンパンジーによって裏付けられる。チンパンジーはけんかの後、キスや抱擁や毛づくろいによって和解する(ドウ・ヴァール、四四・四五頁)。これらの動作は、単に相手の機嫌をとるためのものではない。なぜなら、チンパンジーは「欺き」を行うからである。つまり、けんかの和解には、「私は欺かない」ということの「証し」がなければならぬ。キス・抱擁・

毛づくろいは「証し」なのである。また、チンパンジーには挨拶があることが知られている。ボスに向かつての優劣関係の儀式的確認であるが、雄は深いお辞儀やキス、雌は性器を差し出す（ドゥ・ヴァール、一〇六・一〇九頁）。挨拶の起源も、「証し」なのである。

語ることを動機づけるものは「証し」である。しかし、その「証し」を動機づけるものは、「呼びかけ」である。人は誰かと再会したとき、しばしば抱擁する。抱擁は「証し」であるが、単に「証し」につきないものがそこにある。即ち、人は抱擁もしくは身体の接触を欲求するのである。身体の接触は、物理的な接触ではない。そこに「安心」が生れるのである。例えば、病気を患ったとき、他者が「手を握る」「背中をさする」ことで、苦しみが和らぐ。或いは不安な状態のとき、他者が身体に触れることで人は安心する¹³⁾。抱擁もしくは身体の接触を欲求すること、また身体の接触によつて安心すること、それは他者を呼びかけているからであり、「対」になることを「招く」からである。つまり、語ることを根源的に動機づけるものは、「呼びかけ」である。

四 「体を開く」こと

他者に向かつて「呼びかける」（意識的に呼びかける）ことは、体を開くことである。例えば、声をかけることは口を開くことであり¹⁴⁾、身振りすることは体を開くことである。「やあ」と呼びかけるとき、人は手を開く。或いは、両腕を広げる。他者に対する身振りは必ず、体の開きを伴う。他者を呼びかけることは、他者を「招く」「引き寄せ」ることである。だから呼びかけるときに人は、体を開き、他者を抱擁する身構えをとるのである。

体を開くことは、心を許すことであり、心を安住させることであり、つまりは安心である。人は安らぐとき、或いはくつろぐとき、体を開く。体を緩めることは、くつろぐことであり、ゆつくりと体を開くことである。ゆつくりと体が開かれてゆくのを感ずるとき、身はそこに委ねられ、そこに安心が生れる。身を落ち着かせることが、安心である。身を落ち着かせる場が「心地」となり、安心するのである。心を落ち着かせるとは、身を落ち着かせることなのである。

『広辞苑』（第五版）によれば、「ゆるす」は「緩し」と同源であり、「固く締められているものをゆるくする意」であるという¹⁵。心を許すことは体をゆるくすること、即ち、体を開くことである。体を開くことと心を許すことは同じである。このことは、安心の反対である恐怖から裏付けられる。恐怖を感じるとき、身体は「硬直」し、「行動停止」の身構えとなる。恐怖を「身が縮む」「身が竦む」¹⁶と表現するように、恐怖は体を閉じるのである。

他者が私に向かつて体を開くとき、私の体が同調し、私の体も開かれてゆくのを私は感じる。体を開くことは「身の証し」である。だからこそ、安心が生れ、私も相手に身を委ねる。互いに体を開き合い、身を委ね合うことによつてはじめて、「語らい（語り合い）」が可能となる。他者に対して体を開くことは、語りの「開始」である。始まりは開くことからである。体を開くことが、すべてのコミュニケーションに先立つのである。

五問（ま）

「語らい」が生まれるためには、人と人（あいだ）に「間（ま）」が存在しなければならぬ¹⁶。その「間」

は、人と人が互いに体を開き合うことによつて生成する。

「間」には空間的な「間」と時間的な「間」がある。人は、他者が近づき過ぎたり、遠過ぎたりすると、不快感や違和感を覚える。人と人との間には、適切な空間（間合い）というものがあり、そのような適切な空間が確保されて、即ち間合いがとれてはじめて、語りが生れる。また、他者が何かをし続けていると、私は話しかけることができな（意図的に割つて入る場合は別として）。或る持続、即ち時間的な「間」を共有しないと、普通は話しかけようとはしない。また、不意に話しかけられると、人は驚くのである。「唐突」と感じる、即ち相手が「突進」してきたと感じるのである。日常において人は、目を合わせてから話し始める。目を合わせることは、「間」を合わせ（間合いを見て）、「間」を共有することである。いわばリズムを共有することが、語りの条件となる。

したがつて、空間的かつ時間的な「間」が生まれてはじめて、即ち「間合い」がとれて、語らいが可能となる。その「間」は、人と人が互いに体を開き合うことによつて生成する。なぜなら、第一に、体を開き合うとは、お互いの体を同調させることであり、同じ時間的「間」を生成させるからである。第二に、体を開き合うことによつて、共有される空間的「間」が生成するからである。

体を開き合うことはさらに、語らいの根源的な条件である。或いは、言葉というものが生れる条件である。例えば、目の前にリンゴの木があり、リンゴの実がなつていよう。そのリンゴを私が即座にとつて食べれば、言葉が生まれることはない。リンゴについて語ること、あなたに向かつてリンゴを指示することは、リンゴをあなたに「差し出す」ことである。つまり、行為としての語り（何かに「ついて」の語り）が生れるためには、既に世界を他者に差し出していなければならない。「指示する」とは、「差し出す」のである。他者に世界を差し出すとは、他者に向かつて体を開くことである。私を差し出し、世界を差し出すのである。つまり、私と他者が体を開き合い、体を差

し出し合うことによつてはじめて、言葉が生れ、「世界」というものが生れるのである。体を開き合うことによつて共有の「間」が生れ、共有の「間」が生れてはじめて、私と他者の間に共有の世界が生まれるのである。即ち、差し出し合うから、間主観的 (inter-subjective) な世界が私と他者の間に生れるのである。

レヴィナスは、言葉 (parole) は贈与 (donner) することであると語った⁽¹⁷⁾。言葉によつて、他者に世界を差し出すのである⁽¹⁸⁾。つまり、目の前のリングコをすぐに口に入れていようでは、言葉は生れない。口に入れるのを延期し、世界を他者に差し出すことが、言葉が生れる条件である。さらに、レヴィナスがいうように、「住みか」が現れることと、世界や言葉が現れることは関係している⁽¹⁹⁾。それは二つの意味で関係している。第一に、獲得したものを「手から口へ」とその場で食べていては、言葉も世界も生れない。食物の獲得を計画して住みかから出発し、食物を住みかに持ち帰り、分け合つて食べることが前提となる⁽²⁰⁾。第二に、住みかは共同生活の「間」である。体を開き合う場が住みかである。つまり、開き合う「間」がやがて家になるのである。

体を開き合うことによつて、「間」が生れる。その「間」は、やがて「人の住む所」になり、「世の中」になる。体を開きあうことによつてはじめて、共同生活を営むことができるようになる。即ち、「社会」が生れる。つまり、「間」が「社会」となる。社会が生れることによつて、人は「人間」となる。即ち、社会的存在としての人間となる。したがつて、体を開き合うことによつて、「間」が生れ、その「間」が世間になると同時に、人は「人間」になるのである。このことは、「人間」という語の意味変遷によつても裏付けられる。「人間」という語は、元々「人の住む所」「世の中」を意味したが、後に人の意となつたのである⁽²¹⁾。

会話は、発話が誠実であるという想定に基づく。例えば、「雨が降っている」とあなたがいえば、窓の外は雨が降っていると私は信じる⁽²²⁾。この「信」とは、信頼というよりは、相手の言葉を「鵜呑み」するものである。それ

は、言葉が「分かち合い」だからである。即ち、言葉は体を開き合うことによつて生まれる。言葉を発することは、身を差し出すことであり、すべてを自己と他者で分かち合うことである。だからこそ、言葉を「鵜呑み」するのである。言葉は、「分かち合い」なのである。

六 分かち合い

人は欺きを行うし、殺しも行う。しかしそれでも、人は体を開き合つてきた。体を開くことは、「ゆるし（赦し）」であり、憎しみを「放つ」ことである^(註)。他者を憎み続ける限り、憎しみから解放されることはない。憎むとは、体を閉じることである。憎しみから解放されるのは、他者を赦すことによつてのみである。

人が体を開き合つてきたことは、共同生活を選択した方が生存に有利であるという、単に計算によるものではない。打算社会に安らぎはない。計算に掛かり切りになるからである。打算だけでは社会は崩壊する。打算は「独り占め」を指向し、欺きを指向する。安らぎも社会も、体を開くことによつてのみ生まれる。体を開くことを動機づけるのは、情動である^(註)。

他者を傷つけることによつて安らぎを得る人はいない。他個体を攻撃するとき動物は興奮する。他者を傷つけることによつて快楽を感じるとしたら、攻撃という身構えに伴う興奮を快楽と感ずる、倒錯である。他者を傷つけることは、実は自己を傷つけることでもある。なぜなら、人は他者と「対」になるからである。本来、他者と分かち合うことにこそ、人は安らぎを感じるのである。このことは、「罪悪感」や「自責の念」という感情が存在する事実によつ

て裏付けられる。

事故や戦争で生き残った人はしばしば、「生き残ったことの罪悪感」や「他者を見捨てた」という思いに苛まれる。つまり「自責の念」である。例えば被爆者の多くが、通りすがりの見知らぬ人を「見捨てた」という思いに苛まれ続けている（中澤、第三章）。それは、不特定の人々ではなく、ある個人を「見捨てた」という思いである。しかし、なぜ自分に「責任」があると感じるのだろうか。通りすがりの見知らぬ人に、その場に「居合わせた」だけで、「責任」を感じるとはどういうことか。責任を感じるということは、他者と「向かい合う」ときに人は、何かを「背負う」ことを意味する。

「見捨てる」ということは、「かえりみない」「関係を絶つ」ことを意味する。ということは、一旦は関係を持ったことを意味する。つまり、呼びかけがあつたのである。他者と「向かい合う」ときに人は、他者の呼びかけを受けとめると同時に、こちらから呼びかけている。或いは「助けて」という声を聞き、振り向いた瞬間に、人は他者と「対」になっている。いやむしろ、声を聞いた瞬間に「対」になっている。なぜなら、その音を人の声と認識しているからである⁽²⁾。或いは、他者と目が合った瞬間に、他者と「対」になっている。さらにいえば、他者に気づくこと自体が、既に他者と「対」になっている。

他者に気づくことは、「対」の「分かち合い」、即ち他者と自己との「分かち合い」である。その他者が消えることは、結果として自己が「生」を「独り占め」したことになる。だからこそ、「生き残ったことの罪悪感」を覚えるのである。「分かち合い」ながら、「独り占め」してしまつたこと、それは即ち、他者の生を「背負う」ことである。しかし、それを「負い目」として感じるということは、その人が「分かち合い」を指向していることを意味する。つまり、自己に呼びかけがなければ、責任など感じない。呼びかけとは、「対」になることを「招く」ことであり、「分か

ち合いの身構え」、「分かち合いへの情動」である。そして、「分かち合いへの情動」があるからこそ、人は体を開き合ってきたのである。

欲求は「独り占め」を指向する。食欲・性欲は「独り占め」を指向し、そのために欺きを行う。即ち、欺きは体を閉じ、「独り占め」を指向する。しかし、「独り占め」には「後ろめたさ」が伴う。「後ろ」、即ち目の届かないところが気になることは、他者の気配を感じていることを意味する。「後ろめたさ」は、「分かち合い」へと動機づけられていることの証左である。また、不公平に対して人は怒るという事実、さらに不公平な取り分をしばしば拒否するという事実も、「分かち合いへの情動」の証左である。怒りという情動が生じるのは、そもそも公平が動機づけられていたからである⁽²⁸⁾。さらに、人が言語的動物であること、また人類が言葉を使い続けてきたという事実は、「分かち合いへの情動」の何よりの証左である。

人は他者を呼びかけるものであり、「対」になることを「招く」。道徳が生まれたのは、この「対」への情動、即ち「呼びかけ」が存在するからである。「分かち合い」にこそ、人は「安らぎ」を感じる。それは、「分かち合い」から自他が生まれ、「分かち合い」が人間の「まこと」だからである。

文 献

- Behne, T., Carpenter, M., Call, J., and Tomasello, M. (2005). Unwilling versus unable: Infants' understanding of intentional action. *Developmental psychology*, 41, 328-337
- Bergson, H. (1941). *L'évolution créatrice*. Paris (PUF) (reed. Quadrige, 2003) / ベルクソン (1976) 『創造的進化』真方敬道 訳、岩波文庫

- Blakemore,S.-J., and Frith,C. (2005). The role of motor contagion in the prediction of action. *Neuropsychologia*, 43, 260-267.
- Buccino,G., Binkofski,F., Fink,G.R., Fadiga,L., Fogassi,L., Gallese,V., et al. (2001). Action observation activates premotor and parietal areas in somatotopic manner: An fMRI study. *European Journal of Neuroscience*, 13, 400-404.
- Carr,L., Miacoboni, M.-C.,Dubeau, J.C.Mazziotta, and G.L.Lenzi, (2003). Neural mechanisms of empathy in humans:A relay from neural systems for imitation to limbic areas. *Proceedings of the national Academy of sciences of the United States of America*, 100, 5497-5502
- Cosmides,L., and Tooby,J. (1992). Cognitive adaptations for social exchange. In Barkow,J.H., Cosmides,L., and Tooby,J.(eds.) *The adapted mind*. New York(Oxford University Press)
- Dimberg, U. (1990). Facial electromyography and emotional reactions. *Psychophysiology*,27, 481-494
- Fadiga,L., Fogassi,L., Pavesi,G., and Rizzolatti,G. (1995). Motor facilitation during action observation: A magnetic stimulation study. *Journal of neurophysiology*, 73, 2608-2611
- Fadiga,L., Craighero,L., Buccino,G., and Rizzolatti,G. (2001). Speech listening specifically modulates the excitability of tongue muscles : A TMS study. *European journal of neuroscience*, 15, 399-402
- Fehr, E., and Fischbacher,U. (2004). Social norms and human cooperation. *Trends in Cognitive Sciences*, 8, 185-190
- Jackson,P., Brunet,E., Meltzoff,A.N., and Decety,J.(2006). Empathy examined through the neural mechanisms involved in imagining how I feel versus how you feel pain. *Neuropsychologia*, 44, 752-761
- James, W.(1890[1981]). *The principles of psychology*. Cambridge,MA, London(Harvard University Press)
- James, W.(1892[1984]). *Psychology:Brief course*. Cambridge,MA, London(Harvard University Press) \\\`ハ一ㄥ (一〇〇〇-〇) 『全訳』 田寛隆' 訳校文庫
- Jeannerod(2003). Stimulation of action as a unifying concept for motor cognition. In Johnson-Frey(2003)
- Johnson-Frey,S.C.(ed.).(2003). *Taking action : Cognitive neuroscience perspectives on intentional acts*. Cambridge,MA, London(MIT Press)
- Lévinas,E. (1961[1971]). *Totalité et infini*. La Haye(Martinus Nijhoff) \\\`ハ一ㄥ (二〇〇〇) 『全体性への無限 (上)』 熊鷹 雄哉訳' 訳校文庫

- Lévinas, E. (1974). *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*. La Haye(Martinus Nijhoff) / シンヤノス (1999) 『存在の彼方』 合田正入訳 講談社学術文庫
- Merleau-Ponty, M. (2001). *Psychologie et pédagogie de l'enfant: Cours de Sorbonne 1949-1952*. Lagrassse(Verdier)
- Milkan, R.G. (2005). *Language: A biological model*. Oxford(Oxford University Press)
- Moore, D.G., Goodwin, J.E., George, R., Axelsson, E., and Braddick, F.M.B. (2007). Infant perceive human point-light displays as solid forms. *Cognition*, 104, 377-396
- Niedenthal, P.M., Barsalou, L.W., Ric, F., and Krauth-Gruber, S. (2005). Embodiment in the acquisition and use of emotion knowledge. In Barrett, L.F., Niedenthal, P.M., Winkelman, P.(eds.) *Emotion and consciousness*. New York, London(The Guilford Press)
- Rossetti, Y., and Pisella, L. (2003). Mediate responses as direct evidence for intention: Neuropsychology of not-to, not-now, and not-there tasks. In Johnson-Frey(2003)
- Santey, A.G., Rilling, J.K., Aronson, J.A., Nystrom, L.E., and Cohen, J.D. (2003). The neural basis of economic decision-making in the ultimatum game. *Science*, 300, 1755-1758
- Watkins, K.E., Stratella, A.P., and Paus, T. (2003). Seeing and hearing speech excites the motor system involved in speech production. *Neuropsychologia*, 41, 989-994.
- Xiano, E., and Houser, D. (2005). Emotion expression in human punishment behavior. *Proceedings of the national Academy of science of the United States of America*, 102, 7398-7401
- 市川浩 (1999) 『精神とこころの身体』 講談社学術文庫 (1975年勁草書房刊の増補版)
- 大坪治彦 (2001) 『人の意識が生かせるもの』 講談社選書メチエ
- キーナン, J.P., キャランツ, G.J., ノーマン, D. (2006) 『ふたはなはる脳——鏡の中の顔』 とまひろ書院 山下篤士訳 NHK ブックス
- ダマシオ, A.R. (2005) 『感じの脳』 田中光彦訳、ダイヤモンド社
- マウ・ヴァール, F. (1994) 『政治をするサルーチンパンジーの権力と性』 西田利貞訳、動物社
- 友野典男 (2006) 『行動経済学—経済は「感情」で動いている』 光文社新書

中澤正夫 (2007) 『ヒバクシャの心の傷を追って』 岩波書店

西田利貞・保坂和彦 (2001) 「霊長類における食物分配」、西田利貞編『講座・生熊人類学 8 ホミニゼーション』京都大学学術出版会

バーン R.W. (1998) 『考えるサルー知能の進化論』 小山高正・伊藤紀子訳、大月書店

和辻哲郎 (2007) 『人間の学としての倫理学』 岩波文庫 (初版は1934年岩波全書)

- (1) 同調性という考えは市川 (二八一・一八五頁) に基づく。
- (2) ミラー・ニューロンに関しては Blakemore & Frith, Buccino et al. などを参考にしてている。ミラー・ニューロンは最初サルにおいて発見されたが、人にも存在することが確かめられている。
- (3) 「対」という語は、フッサール『デカルト的省察』(五一節) から借用した。
- (4) 身体と同調性によつて共感が生じることは、脳研究によつて裏付けられている。顔の表情を観察しても模倣しても、ミラー・ニューロンと情動システム (大脳辺縁系) が活動することが確かめられている (Carr et al.)。
- (5) 想像によつて模倣できることは、脳研究によつて確かめられている。或る動作を想像しても、実際に行つても、同じ脳部位が活動する (Jeannerod)。また苦痛状況を、想像しても実際に体験しても、他者が体験しているところを見ても、同じ脳部位が活動する (Jackson et al.)。
- (6) ここでは、ウィリアム・ジェームズによる概念定義に従つてている。「その対象を区別し、識別し、まわりからその対象を区切り、その対象が同一であると認める機能を概念作用と呼ぶ。」(James, 1892, p.210 邦訳 (下) 十七頁) 訳は邦訳を参考にしつつ、自由に変えている。以下の引用についても同様である。また同様の定義は Millikan (p.69) にも見られる。
- (7) 他者の行動をその目的に従つて理解し始めるのは生後九ヶ月頃からである。例えば、他者の行動について「わざとしない」と「できない」を区別し始めるのは、生後九ヶ月頃からである (Behne et al.)。
- (8) 行動の「抑制・遅延」と意識とが関係しているという考えは、哲学者では Bergson (1941, p.145 邦訳一七七・一七八頁)。

Lévinas (1961, p.140 邦訳 (上) 三三八頁)、脳研究者では Rossetti & Pisella に見られる。

(9) このことは、行為と知覚と言語の同型性が存在する。即ち、指示対象を持つのである。

(10) このことは、「まこと」という語が「真実」と「偽り飾らないこと」という二つの意味を持つことと合致する。一般に、前者には「真」、後者には「誠」という漢字が使用される。また、「誠」は成が音を表し、かさなる意の語源(重)からきている。

(11) 人は欺きに特に敏感で、欺きを発見するための特別な装置を持っているようである (Cosmides & Tooby)。また、現存の類人猿は欺きを行うことが知られている。類人猿の欺きについては、バーン (二八一・二〇四頁) を参考にしている。

(12) チンパンジーも身体との接触によって、安心するようである (ドウ・ヴァール、四一・四二頁)。

(13) 語ることは体を開くことであると気づかせてくれたのは、レヴィナスである。「他人に身を委ねること (exposition) としつゝの語ること (Lévinas, 1974, p.61 邦訳一二四頁)」。「コミュニケーションの開口は、自己をむき出しにするという危険を冒すことの中に、真摯さのうちに、内面を破裂させて一切の保護を放棄することのうちに、外傷に身をさらすことの中に、可傷性のうちに、存している (p.79 邦訳一二五・六頁)」。

(14) 白川静『新訂字訓』(平凡社、2005)も参考にしている。

(15) 疎むの「束」は、「ひきしまる」という意の語源「縮」からきている。

(16) 「あいだ」と「ま」を区別するために、以下「ま」は「間」と括弧つきで表記する。

(17) 「贈与すること」で与えられたものとして現象を現前させることで、言葉はひたすら共通性を創設する。即ち、主題化(対象を意識)しながら与えるのである。(Lévinas, 1961, p.72 邦訳 (上) 一九一頁)

(18) 「主題化するとは、言葉によって他者に世界を差し出す (offrir) ことである。」(Lévinas, 1961, p.184 邦訳 (下) 六六頁)

(19) 「住みか (démure) から出発する」ことにより、世界が潜在的に生れる。享受することと延期することによって、世界とどうものが接近可能となる。(Lévinas, 1961, p.130 邦訳 (上) 三二七頁) レヴィナスは住みかを、表象・言語・自己概念・意識と同じ構造(間隔を持つという構造)を持つと考え、これらの誕生は同時であると考えているようである (pp.105, 145, 147, 185, 214 邦訳 (上) 二六〇・三四九・三三三(下) 六七・一三二頁)。

(20) このことには傍証がある。人以外の動物は、たいてい食物をその場で食べる。人は、たいてい持ち帰って食べるのである

る(西田・保坂、二五七、二五八、二九〇頁)。

(21)この点は、和辻(一八・二九頁)を参考にしている。なお『大辞林』(第三版)によると、「人」をあらわすようになったのは、中世末から近世にかけてのことであつたという。

(22)このような想定は、誠実条件と呼ばれる。例えば、戸を閉めるように命令するときは、聞き手が戸を閉めることを話し手が願望していること。約束するときは、そのようにすることを話し手が意図としていることである。

(23)「放す」には「氣を許す」という意味がある。

(24)ここで情動(emotion)と感情(feeling)の区別をしておきたい。本稿では、心理学用語とは少し異なる語法をとる。情動は無意識の「身構え」、「行動への姿勢」である。その身構えを認知して生じるのが感情である。この区別の論点は、情動は心的状態ではなく、全身の状態であり、身構えであるということにある。心的状態としてしか情動を見ないことが、これまで情動が無視されてきたことの原因であろう。情動が身構えであることの根拠は次のおりである。例えば、我々は笑うとき、こぶしを固めることはできないし、体に力を入れることはできない。恐れは、「縮み上がる」と形容されるように、全身の収縮である。情動とは、全身の反応であり、或る「身構え」になることである。身構えとは行動への姿勢である。これらは根源的には、行動の推進と行動の停止に還元されるのであろう。情動と感情の区別に関しては、ダマジオ(二・三章)に啓発されるところが大きい。少し異なるところもある。例えば、ダマジオは「罪悪感(guilt)、同情(sympathy)、恥(shame)」を情動に分類するが、私はこれらを感じとみなす。身体の状態を情動と捉える考え方は、ウィリアム・ジェームズに遡る。「刺激する事実を知覚することによってすぐに身体の変化が生じる。この変化を生じているとおりに感じると、情動になる(James, 1890, p. 1065)」。ウィリアム・ジェームズの考えを最近発展させたものに、「体現(embodiment)」説がある。刺激の知覚によって生じる身体状態を体現(情動を体現するもの)と呼び、その体現が十分強く、かつその体現に注意が向けられたときに、意識的な感情となる、と考えるものである(Niedenthal et al.)。

(25)メルローポンティがいうように、聞くことは話すことと並び、話すことは聞くこととである(Merleau-Ponty, pp. 58-59)。したがって、他者の声を声として聞いた瞬間に、私も他者に潜在的に発声している。即ち、声を聞いた瞬間に私はもうその他者に呼びかけている。「聞くことは話すこと、話すことは聞くこと」ということの根拠は、知覚の問題になるのでここで説明することはできないが、実験的事実を一つ挙げる。他者の声を聞くとき、私の舌や唇が活動することが確かめ

られている (Fadiga et al, 2001; Watkins&Paus)。

(26) 不公平には人は怒るという「不公平な取り分をしばしば人は拒否することは」、「最終提案ゲーム (ultimatum game)」といった経済学の実験によって確かめられている。もし人間が全く利己的であったなら、即ち、自分の利得を最大化することが行動原理であるなら、一円の取り分でも受諾するはずである。しかし多くの人は、不公平な取り分を拒否する。不公平には人は怒るのである。しかも、損得と怒りの間で人は葛藤するのである。以上のことは、脳研究からも裏付けられている。情動系(島皮質)がより活動すると不公平な提案を拒否し、思考系(前頭皮質)がより活動すると受諾するのである (Sanley et al)。つまり、損得を計算すれば受諾だが、情動が許さないと拒否する。参考文献としては次がある。友野(三〇七-三二八頁) 'Xiao&Houser', 'Fehr&Fischbacher'。